

地方別に見た学校体育の年間指導計画に関する研究

—高等学校における実態と相違について—

大坪敏郎*・井筒次郎*・富田幸博**

日高義晴***・富岡元信*

(昭和 63 年 11 月 7 日受付, 昭和 63 年 12 月 24 日受理)

A Study on Yearly Curriculum of Physical Education in High School

—Regional Differences and Their Cause—

Tosio OTUBO, Jiro IZUTU, Yukihiko TOMITA,

Yoshiharu HIDAKA and Motonobu TOMIOKA

The followings are the conclusions obtained through our research regarding yearly curriculum of high school physical education focusing on its regional differences and the cause of them.

1. Apparent regional differences are noted in the athletic facilities in high schools. For example, in Hokkaido there are fewer swimming pools and gymnasiums. This fact leads to fewer swimming lessons there.

2. In Kanto, Kinki and Chugoku district, there are quite a few high schools with excessive student enrollment suffering from poor gymnastic education especially in bad weather. The data shows that these districts have a smaller number of schools achieving the average gymnastic teaching hours. It means that the size of schools brings about the difference in gymnastic teaching hours.

3. Even in those over populated schools, if one credit teaching hour is run with 3 classes together, the poor operation under bad weather will be avoided.

4. As for field exercise teaching hours, the size of a school (the number of students) has no influence.

It is possible that the space of gymnasium per student can effect the teaching hours of various kinds of exercises taken in gymnasium.

6. We also observed the regional differences in the types of exercises offered to the students. It is true that in the 3rd-grade gymnastic hours in which students can make their own choice of exercises increased; this is probably because 3rd-graders have more interest in physical exercises and also because of the effort on teachers side to make them enjoyable for the students.

In a word, the above is not the regional difference, but the difference of the attitudes among the gymnastic teachers toward the 3rd-graders.

7. Hokkaido stands high in planning a yearly gymnastics curriculum making the most of its regional characteristics.

8. Through this research, we obtained useful information on framing and drawing up the yearly gymnastics curriculum, as the data gave us the idea of scheduling both the teaching materials and the subjects according to sex or grades.

* 教職教育 III, ** 短大・体育科 1, *** 短大・一般・教職

I. 研究の目的

年間計画は年間における学習指導の見通しを持ち、計画的に指導を展開していくための基本となるものである¹⁾。体育の年間計画は他の教科のそれとともに、各学校の教育目標を達成するための手段的方法であるといえる。

高等学校学習指導要領は、第1章総則、第1款 教育課程編成の一般的方針等において、地域や学校の実態、課程や学科の特色及び生徒の能力・適性・進路等を十分考慮して、適切な教育課程を編成すべきであると述べている²⁾。また、同学習指導要領解説(保健体育編 体育編)は第3章、指導計画の作成と学習指導において、内容の決定にあたっては、生徒の能力・適性や男女の特徴に応じて各領域の中から種目を選択し指導できるとしている³⁾。

さらに梅本は、体育科の学習内容設定にあたり考慮すべき諸点として、体育の目標との関連、体育科の授業時数、学習者の発達や能力、教師の指導力、施設設備の整備状況、地域の特性、そして学習指導要領等の教育制度に従うことあげている⁴⁾。上記のことから、体育科の学習内容の設定に影響を及ぼす要因は、主に学習者の興味や関心、能力や適性、性差、教師の指導力、施設設備の整備状況、及び地域の特性であると考えることができる。従って、体育科の学習内容は地域あるいは一様でない条件の下では当然異なっていると推察される。1972年の高等学校学習指導要領解説 保健体育編は、内容の取り扱いの項で、体育理論を含めた8領域について、取り扱うまでの標準の割合を示していた⁵⁾。ところが、現行学習指導要領は共通必修の領域を体操と体育理論の2領域だけとし、各運動領域の内容については、学校や教師の創意を生かした指導を配慮して領域名や種目名を示

したに留めている⁶⁾。スポーツの領域では学年別に選択すべき数を示しているが、基準や目安となる領域別あるいは種目別⁷⁾の時間配分は示されていない。従って、地域によって当然異なるであろう体育の年間計画が実際どのように表わされ、それぞれの領域や種目がどの程度扱われているのかは予測できない。また、地域によって異なるとするならば、それがどういった要因なのかも不明である。そこで本研究では、体育の年間計画に関する地方別の実態や相違を明らかにし、限られた条件の中で年間計画を作成する場合、その参考となる資料を得ることを目的とした。

II. 方 法

1. 研究の構成

本研究は第一次調査及び第二次調査の結果から構成されている。第一次調査では、各学校の運動場、体育館の広さ、プール、武道場の有無、体育の単位数、1単位時間内の最大授業数、雨天時の授業展開に支障を来たすクラス数を明らかにした。第二次調査では、各種目の男女、学年別配当時間について質問した。

2. 対 象

調査対象は本学学部3年生の出身高等学校であり、調査票への記入は各高等学校体育科主任とした。なお、両者の調査ともに回答のあった対象校数を表1に示した。

3. 調査の方法

質問紙留置法であり、調査票の配布、回収には本学学部3年生が直接各出身高等学校へ赴きあつた。

4. 調査の期間

第一次調査 1987年6月～7月

第二次調査 1987年8月～9月

表1 調査対象数

	北海道	東北	関東	中部	近畿	中国	四国	九州・沖縄	計
男子校	1	4	18	3	2	2	0	5	35
女子校	0	3	18	4	1	1	0	8	35
共 学	16	29	118	80	37	27	21	31	359
計	17	36	154	87	40	30	21	44	429

北海道：北海道

東 北：青森・岩手・宮城・秋田・山形・福島

関 東：茨城・栃木・群馬・埼玉・千葉・東京・神奈川

中 部：新潟・富山・石川・福井・山梨・長野・岐阜・静岡・愛知

近 縮：三重・滋賀・京都・大阪・兵庫・奈良・和歌山

中 国：鳥取・島根・岡山・広島・山口

四 国：徳島・香川・愛媛・高知

九 州・沖 縄：福岡・佐賀・長崎・熊本・大分・宮崎・鹿児島・沖縄

表2 運動場の広さ (直線 100 m と一周 200 m のコース)

(%)

	北海道	東北	関東	中部	近畿	中国	四国	九州・沖縄
両方とれる	94.1	94.4	74.7	87.4	92.5	86.7	90.5	88.6
一方とれる	0	5.6	11.0	10.3	5.0	13.3	9.5	9.1
両方とれない	5.9	0	14.3	2.3	2.5	0	0	2.3

III. 第一次調査結果 対象の特性

1. 運動場の広さ

表2は運動場の広さについて、直線 100 m と一周 200 m のコースがとれるか否かを示したものである。

「両方とれる」に回答した関東地方の値が約 75% と他の地方に比べ若干低くなっているものの有意差は認められなかった。

2. 体育館の広さ

体育館の広さについては、バスケットボール・コート 2面がとれるか否かを目安とし質問した。結果を図1に示した。

地方間に差が認められ ($p < 0.001$)、特に北海道でバスケットボール・コート 2面のとれる学校が約 50% と少ないことがわかる。「公立学校施設の実態調査」⁸⁾ を基に算出した値でも、北海道における公立学校一校あたりの平均屋内体育館面積は 1151 m^2 と全国都道府県の中で最も狭いという結果になっている。

3. 武道場の設置状況

図2には独立した武道場の設置状況を示した(男子校共学校のみ)。

いずれの地方でも約 90%、あるいはそれ以上の設置率を示し、地方間に有意差は認められなかった。

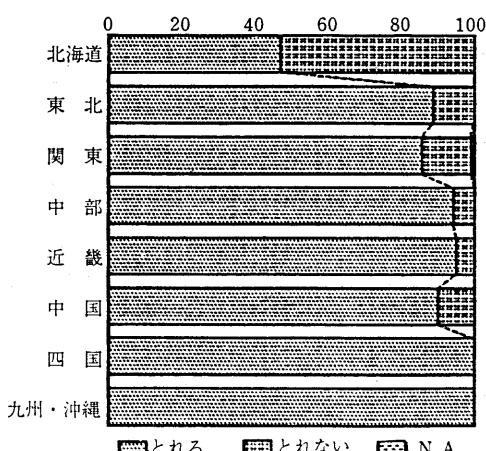


図1 体育館 (バスケットボールコート 2面)

4. プールの設置状況

図3にプールの設置状況を示した。

地方別の設置率に差が認められ ($p < 0.001$)、特に北海道で 17.6% と低くなっている。関東、中国の各地方でも 50~60% 程度である。

5. 単位数

学習指導要領は、体育の標準単位数を 7~9 とし、全

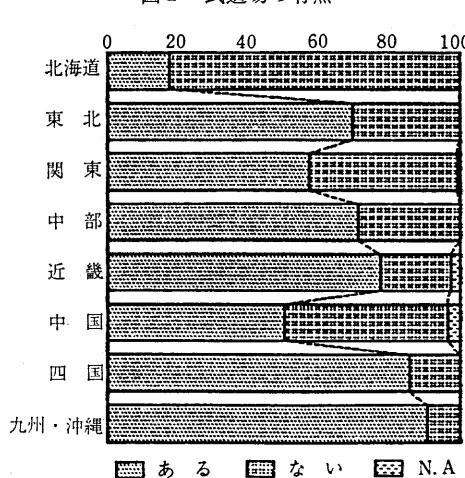
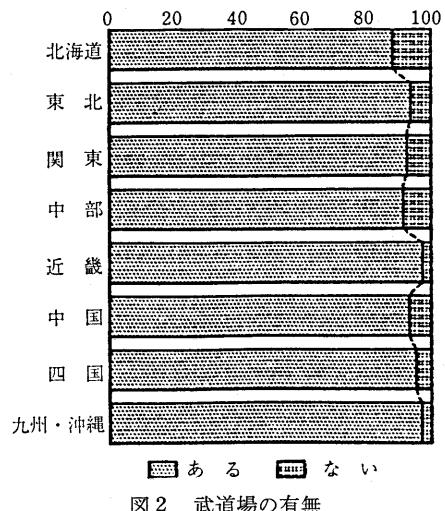


図3 プールの有無

日制課程の普通科男子については 11 単位を下らないことと定めている⁹⁾。

表 3 は体育の単位数を男子について示したものである。

地方間に単位数についての有意差が認められた ($p < 0.001$)。学習指導要領に示された最低単位の 11 単位に着目すると、関東、近畿、中国の各地方で条件を充たす学校が 80% に達していないことがわかる。なお女子については差が認められず、全ての地方で 92% 以上の学校が 7~9 単位の範囲にあった。

6. 1 単位時間内の最大クラス数について表 4 に示した。

最大限になる場合が週何度あるかまでは明らかでないが、3 クラスまでと 4 クラス以上に分類¹⁰⁾して見ると、地方間に有意差が認められた。1 単位時間内のクラス数が多いことは、該当学校の総クラス数が多いことによってもたらされたものであると考えられる。そこで学校規模に着目し、特に過大規模校¹¹⁾について見ると、北海道

0%，東北 5.6%，関東 24.0%，中部 6.9%，近畿 42.5%，中国 33.3%，四国 9.5%，九州・沖縄 11.3% と関東、近畿、中国の各地方に多くなっている。つまり、これらの地方に 1 単位時間 4 クラス以上になる学校が多いことは、過大規模校が多いことによってもたらされたものであると判断できる。北海道、東北地方では、3 クラスまでと回答した学校が 70~80% を占めている。

7. 雨天時に施設が使用できなくなるクラス数

1 単位時間内の授業クラス数の多少と、施設の設置状況が雨天時の授業に影響を及ぼす主たる要因となる。表 5 は雨天時に支障を来たすクラス数について示したものである。

結果は地方間に差のあることを示している ($p < 0.001$)。表 4 の結果を反映して、関東、近畿、中国の各地方で、影響を受けないとした学校が 50% 以下になっている。特に関東地方では雨天の場合、3 クラス以上に影響が出るとした学校が 17.5% 見られる。逆に小規模校が多いと考えられる北海道、東北の各地方では、影響を

表 3 体育の単位数（男子）

(%)

	北海道	東北	関東	中部	近畿	中国	四国	九州・沖縄
6 単位	0	0	0	1.2	0	0	0	88.2
7~9 単位	11.8	9.1	20.6	12.0	23.0	17.2	9.5	5.6
10 単位	0	3.0	5.9	6.0	0	3.4	4.8	8.3
11 単位以上	88.2	87.9	73.6	80.7	76.9	79.3	85.7	83.3

* 全日制課程の普通科を置く学校のみを抽出し示した

表 4 1 単位時間内に実施される授業の最大クラス数

(%)

	北海道	東北	関東	中部	近畿	中国	四国	九州・沖縄
1 クラス	11.8	11.1	0.7	3.4	7.5	3.3	9.5	2.3
2 クラス	29.4	36.1	16.2	16.1	7.5	10.0	23.8	15.9
3 クラス	29.4	33.3	22.7	32.2	20.0	20.0	33.3	34.1
4 クラス	29.4	13.9	40.9	37.9	32.5	40.0	23.8	31.8
5 クラス～		5.6	18.8	10.3	32.5	20.0	9.5	13.6
NA			0.7			6.7		2.3

表 5 雨天の場合、施設が利用出来なくなるクラス数

(%)

	北海道	東北	関東	中部	近畿	中国	四国	九州・沖縄
ない	64.7	75.0	33.1	62.1	40.0	46.7	61.9	50.0
1 クラス	29.4	11.1	24.7	23.0	30.0	20.0	19.0	29.5
2 クラス	5.9	13.9	22.7	10.3	12.5	13.3	9.5	15.9
3 クラス			9.1	3.4	5.0	16.7	9.5	2.3
4 クラス			5.2	1.1	5.0			
5 クラス～			3.2		2.5			
NA			1.9		5.0	3.3		2.3

受けないとした学校が多く、それぞれ 65~75% 程度見られる。

IV. 仮 設

第一次調査の結果、地方別に見て、施設の設置状況、体育の単位数、学校規模に差が認められることから、当然、体育の学習指導に関する種目の取り扱い、あるいは時間配分での相違が予測される。

学校特性に関する結果等から導き出される仮説は以下の様に設定できる。

- 1 単位時間内の授業が 3 クラスまでであれば、雨天時の授業展開に影響が少なくなる。

- 関東、近畿、中国地方に過大規模校が多い。従って、主に運動場で授業が展開される陸上競技の扱われる時間数は、これらの地方に少なくなる。

- 四国、九州・沖縄地方では 100% の学校で 2 面のバスケットボール・コートがとれる。従ってこれらの地方は、狭い体育館しか有しない学校の多い北海道に比べ、バレーボール、バスケットボール、器械運動等、体育館での授業が一般的である種目の扱われる時間数が多い。

- 武道場の設置率に地方差は認められなかった。従って、格技を取り扱う時間数に差が認められた場合、設置率以外の要因が考えられる。

- 北海道地方では、プールの設置率及び気候との関連で水泳の平均授業時数が少なくなると考えられる。従って、それに替わる種目に特徴が見られる。

- 体育の年間計画が学校や地域の実態、生徒の興味を考慮して作成されているとすれば、特に 3 年生に対しては、進学、就職の準備に対する配慮から選択種目を扱う時間数が多くなる。

- 学習指導要領は学習内容を定めたものの、それらの時間配分については示していない。本調査の結果、各領域及び種目別の時間配分が明らかになる。

V. 第二次調査結果及び考察

1. 1 単位時間内の最大クラス数と雨天時に影響を受けるクラス数との関係

表 6 は 1 単位時間内の最大クラス数が 3 クラスまでの学校の割合と、雨天時に全く影響を受けずに授業が展開できる学校の割合を示したものである。両者の値は似通った傾向を示していることがわかる ($r=0.58$)。つまり、3 クラスまでの割合が多い学校ほど、雨天時の影響を受けにくいという結果を示している。従って、施設の設置状況は当然考慮すべきであるが、最大限 3 クラスまでの機会を多くして時間割を計画すれば雨天時の影響が少くなることが考えられる。

2. 学習領域の地方別、性別、学年別比較

図 4~図 7 は学習領域を体操、個人的スポーツ、集団的スポーツ、格技（女子についてはダンス）、選択種目、スポーツテスト¹²⁾に分類し、扱われる時間数の割合を地方別、性別、学年別¹³⁾に示したものである。

学習領域別の分類で地方差の認められたのは、1 年生男子の格技と、男女両学年（男子、女子のそれぞれ 1 年、3 年の意）での選択種目である（共に $p < 0.05$ ）。1 年生男子について見ると、北海道、東北地方では格技を扱う時間数の少ない学校が多く、近畿、中国、九州・沖縄地方では逆の現象が見られる。

選択種目の時間数は、1 年生の男女共、北海道に多い。3 年生では男子の場合、東北、九州・沖縄地方に多く、中国地方で少ないとわかる。女子について見ると、関東、中部、四国、九州・沖縄地方で 30% を越え、中国地方に少ないという結果を得た。

なお、年間計画を作成するにあたって、参考になるとされる領域別の時間配分は、各種目の時間数を合計した結果、表 7 に示すとおり明らかにされた。表 7 に示した値は全ての地方でこの範囲に該当している。

3. 種目別に見た時間数の地方別比較

学習領域別に見た結果では、格技と選択種目の扱われる時間数について地方別の相違が明らかにされたものの、具体的な種目については不明であった。ここではいく

表 6 1 単位時間内の最大クラス数と雨天時に影響を受けるクラス数との関係

(%)

	北海道	東北	関東	中部	近畿	中国	四国	九州・沖縄
最大 3 クラスまでの割合	70.6	80.5	39.6	51.7	35.0	33.3	66.6	52.3
雨天時に全く影響を受けない割合	64.7	75.0	33.1	62.1	40.0	46.7	61.9	50.0

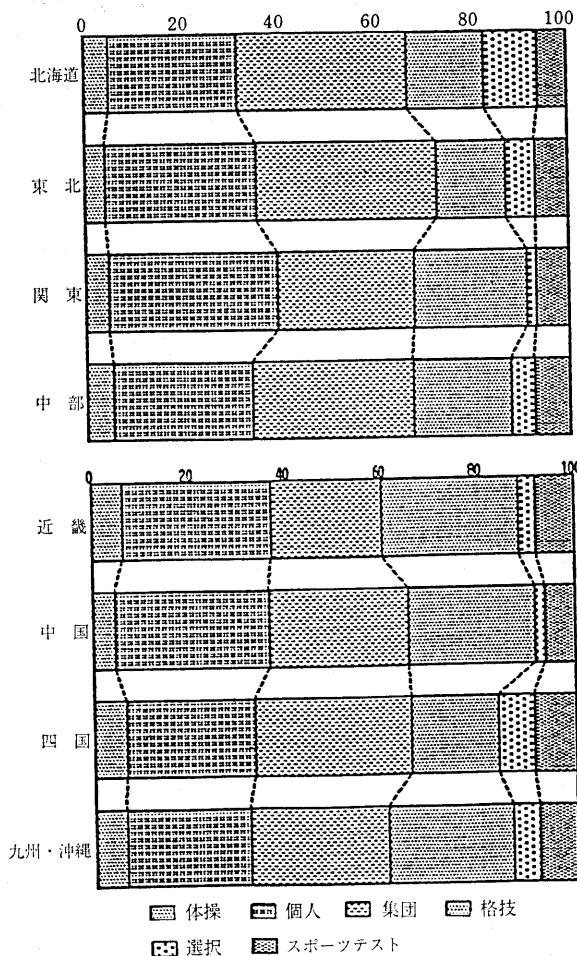


図4 1年男子

つかの種目を取り上げ、地方別の相違を検討した。

(1) 陸上競技

陸上競技の年間授業時数に占める割合について表8に示した。

陸上競技は一般的に運動場にて学習される。従って、扱われる時間数は運動場面積や1単位時間内のクラス数に影響を受けると考えられる。運動場の広さに地方間の差は認められなかったことから、仮に差が認められた場合、学校規模による要因が考えられる。ところが、結果は過大規模校の多い関東、近畿、中国の各地方とそれの少ない北海道、東北地方の間に男女両学年とも差がないことを示している。例えば、1年生男子について見ると、障害走の扱われる時間数は北海道、東北地方より関東地方が多く ($p < 0.05$)、走り幅とびの時間数は東北、関東、

中部、四国地方に比べ九州が少ない ($p < 0.05 \sim 0.001$) といった差は認められる。しかし、陸上競技という単元¹⁴⁾でとらえれば、男女両学年とも地方間に差は認められない。つまり仮説は棄却されることになる。このことは、陸上競技が走、跳及び投の運動から構成され、運動場面積を考慮した取り扱いが可能であるという特性を有していることによるものであると推察する。

(2) 器械運動

器械運動の年間授業時数に占める割合を表9に示した。

特に体育館面積の狭い学校が多く見られた北海道に着目したが、その他の地方に比べ男女両学年とも時間数に差は認められなかった。なお、本種目は、北海道を除く全ての地方で男女共3年次に扱われる時間数が減少する

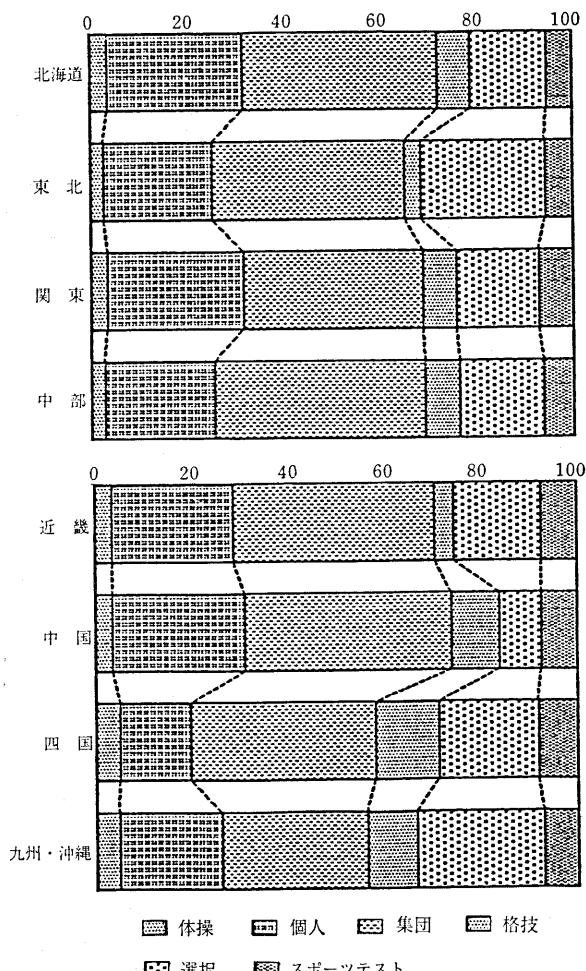


図 5 3年男子

という傾向にあることがわかる。

(3) バレーボール・バスケットボール

主に体育館にて学習されると考えられるバレーボール、バスケットボールの時間数について表 10 に示した。

表 10 からも扱われる時間数に地方間の差は認められなかった。つまり仮説は棄却された。従って、体育館の広さは器械運動、バレーボール、バスケットボールといった種目の扱われる時間数に影響を及ぼさないと推察される。

体育館面積の狭い学校の多い北海道地方が、他の地方と同様の時間数でこれらの種目を扱うことが可能なのは、学校規模に関係していると考えられる。表 4 はこの地方に最大 3 クラスまでの学校が 70.6% を占めていることを示していた。つまり、施設の設置状況の不足を学

校規模が補っているという状況が推察できる。以上のことから、体育館を使用して学習される種目の取り扱い時間数に影響を及ぼす要因は学校規模と施設の広さのバランスにあると言える。

(4) 格技

格技は武道場にて学習される。従って、武道場の有無は本領域の取り扱いに直接的影響を及ぼすことになる。取り扱われる時間数の割合を表 11 に示した。

1 年次で扱われる時間数に有意差が認められるることは図 4 で明らかにされた。ところが、武道場の設置率で差は見られなかった。扱われる時間数の少いのは北海道、東北の各地方であるが、施設条件と学校規模からはこの結果を考察し得ない。つまり、必然的結果であるとは考えられない。あえて共通点をあげれば、共に寒冷地

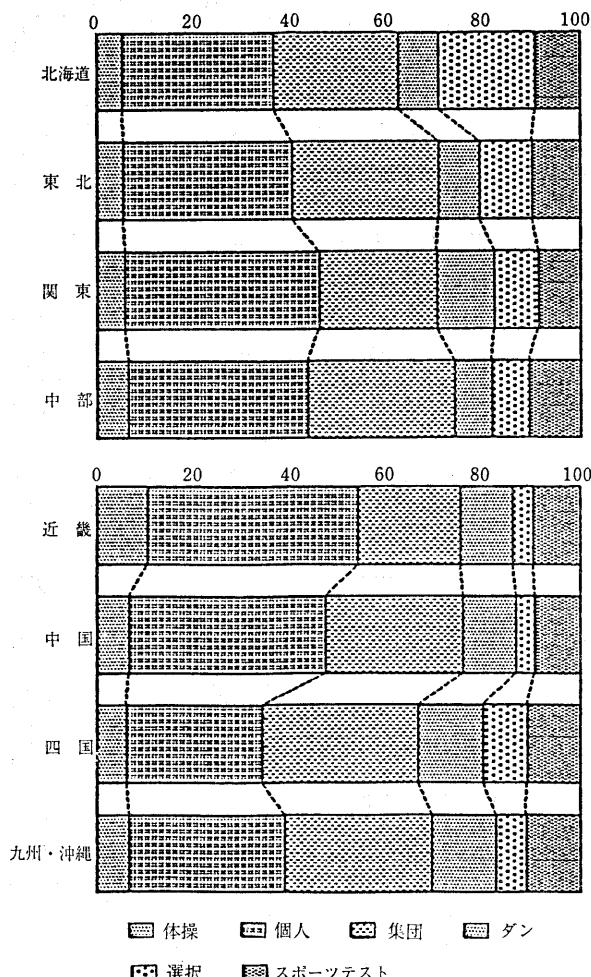


図6 1年女子

であるという点であるが、寒冷地になると何故少なくなるのかといった理由は明らかでない。なお、本領域も全地方を通じ3年次に扱われる時間数が減少する傾向にある。

(5) 水泳

水泳も格技同様、使用される施設の有無によって取り扱いに直接的影響を受ける種目である。図3は北海道地方におけるプールの設置率が他の地方に比較し大幅に低いことを示していた。表12に水泳の扱われる時間数を示したが、北海道地方で男女両学年とも扱われる割合が2~2.5%にしか達していない。また、表13は3か年を通じて全く水泳を扱わない学校の割合を示したものである。

北海道地方で3か年を通じ全く水泳を扱わない学校が男女共約75%に達し、他の地方に比較して多いことを示している($p<0.001$)。全地方を通じ、本種目を3か年間一度も扱わない理由の100%がプールの無いことをあげており、気候的要因をあげた学校は見られなかった。北海道における時間数の少なさは、寒くて扱えないのではなく、プールの設置率が低いために扱えない学校が多くあることによってもたらされたものであると言える。

(6) 選択種目

学習領域別比較では、男女両学年とも選択種目を扱う時間数に地方差のあることが明らかになった。表14、表15は選択種目の具体的種目名について、特に男子を取りあげ学年別に示したものである。

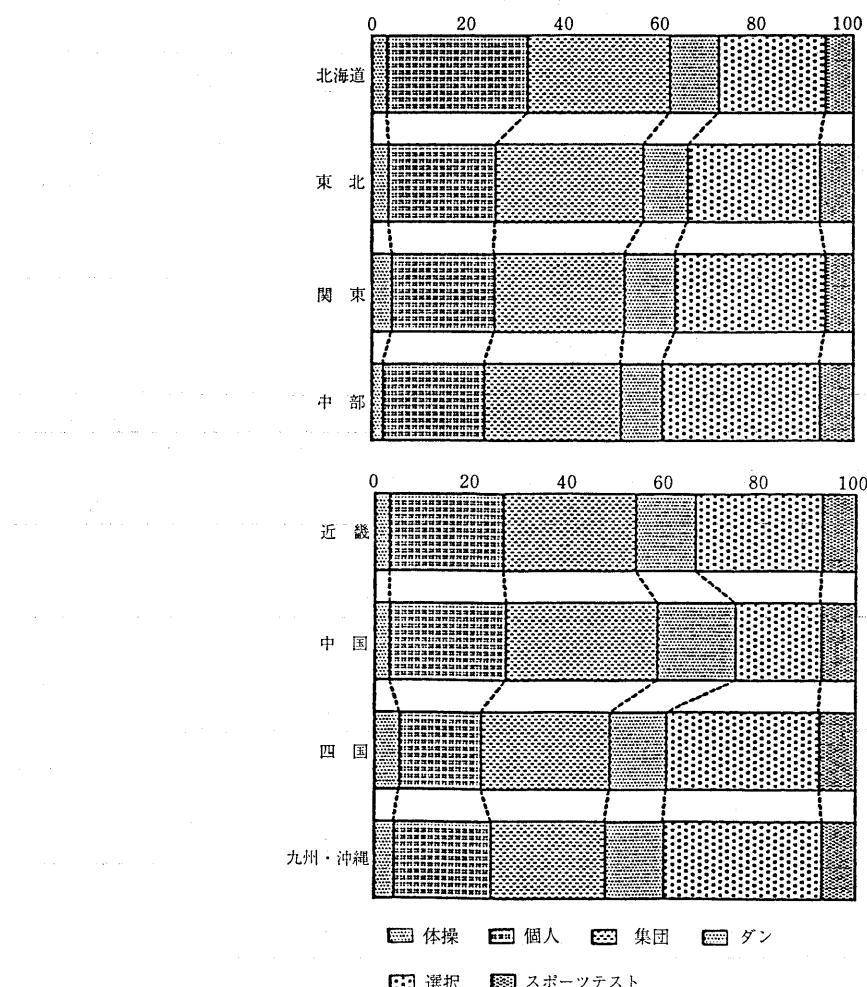


図7 3年女子

表7 学習領域別の時間配分

(%)

	男 子		女 子	
	1年	3年	1年	3年
体 操	4~7	3~5	5~10	3~5
個人的スポート	25~35	15~28	28~43	15~30
集団的スポート	25~35	33~45	20~33	25~30
格 技	15~28	3~13		
ダ ン ス			7~14	9~17
選 択 教 材	2~11	16~25	5~20	18~35

表8 陸上競技の年間授業時数に占める割合

(%)

	北海道	東北	関東	中部	近畿	中国	四国	九州・沖縄
男子								
1年	16.6	16.7	19.9	15.7	16.4	20.6	16.7	14.7
3年	17.5	13.6	16.0	12.6	12.6	16.5	8.0	10.2
女子								
1年	18.2	18.2	23.0	19.8	24.5	23.1	16.7	17.6
3年	17.5	11.5	10.6	11.1	12.2	11.6	9.3	9.4

表9 器械運動の年間授業時数に占める割合

(%)

	北海道	東北	関東	中部	近畿	中国	四国	九州・沖縄
男子								
1年	7.8	7.6	8.7	6.4	8.4	7.5	6.7	4.7
3年	8.4	2.9	3.9	3.7	5.3	6.1	2.3	1.8
女子								
1年	10.7	9.1	9.6	8.2	10.8	12.4	6.8	6.2
3年	9.5	4.1	4.0	3.6	6.1	8.6	3.9	3.3

表10 (バレーボール・バスケットボール) の総時間数に占める割合

(%)

	北海道	東北	関東	中部	近畿	中国	四国	九州・沖縄
男子								
1年	21.4	21.7	15.4	17.4	11.2	17.4	18.0	14.9
3年	26.8	27.0	21.3	25.7	23.3	24.9	23.4	20.2
女子								
1年	26.4	28.8	20.3	25.7	18.1	25.1	29.6	23.9
3年	27.7	29.4	22.7	24.2	23.1	27.7	23.4	21.3

表11 格技の年間授業時数に占める割合

(%)

	北海道	東北	関東	中部	近畿	中国	四国	九州・沖縄
1年	16.0	14.3	23.5	20.2	28.4	26.3	20.0	25.9
3年	6.8	2.8	7.0	7.3	4.0	10.1	13.2	9.7

表12 水泳の年間授業時数に占める割合

(%)

	北海道	東北	関東	中部	近畿	中国	四国	九州・沖縄
男子								
1年	2.4	7.1	6.5	6.8	6.2	4.1	3.5	6.4
3年	2.1	6.1	8.4	6.5	7.4	5.0	4.4	9.3
女子								
1年	2.4	7.6	7.5	8.9	8.2	5.0	4.5	8.4
3年	2.4	6.8	6.9	6.5	5.5	4.1	3.9	7.6

表 13 3か年を通じて水泳を全く取り扱わない学校の割合

(%)

	北海道	東北	関東	中部	近畿	中国	四国	九州・沖縄
男 子	76.5	30.3	31.6	24.1	20.5	31.0	9.5	16.7
女 子	75.0	31.3	30.9	26.2	23.7	42.9	19.0	20.8

表 14 選択種目 (1年男子)

(%)

	北海道	東北	関東	中部	近畿	中国	四国	九州・沖縄
ソフトボール	0.9	2.9	1.0	1.5	1.4	0.6	4.1	2.3
相撲	0	0.6	0	0	0	0	0.1	0
テニス	0	0.2	0.2	0.5	0.7	0.1	1.5	0.7
卓球	0	1.7	0.6	1.4	0.4	0.1	1.3	1.3
バドミントン	0	0.8	0.2	0.7	0.3	0	0.6	1.5
スキーアー	8.7	0	0	1.0	0.8	0	0	0
スケート	1.7	0	0	0	0	0	0	0
その他	0	0.7	0	0.4	0	1.4	0	0
計	11.3	6.9	2.0	5.5	3.6	2.2	7.5	5.8

表 15 選択種目 (3年男子)

(%)

	北海道	東北	関東	中部	近畿	中国	四国	九州・沖縄
ソフトボール	5.8	9.2	7.0	3.7	4.9	4.5	11.9	10.1
相撲	0	0.6	0	0	0	0	0.1	0
テニス	0.7	4.3	4.4	3.6	7.4	2.4	2.6	6.0
卓球	4.1	4.7	2.6	4.0	2.8	1.4	3.9	4.4
バドミントン	2.7	4.4	2.6	4.7	3.0	0.6	2.3	4.3
スキーアー	1.7	2.7	0	1.2	0	0	0	0
スケート	0.9	0	0.5	0	0.1	0	0	0
その他	0	0	0	0.2	0	0	0	0
計	15.9	25.9	17.1	17.4	18.2	8.9	20.8	24.8

これまでの結果では、1年次の北海道地方に時間数の多いことが明らかであった。表 14 から、それは地域の特性を生かしたスキーの扱われる時間数が他の地方に比して多いという理由にあることがわかる。格技、水泳における時間数の少なさが、地域特性を生かしたスキーによって補われているという結果が推察される。ところが3年次になると、スキーは減少し、他の地方と扱われる種目が似通った傾向になる。選択種目について考えられることは、その扱いが施設条件や学校規模によって規定されないということである。仮に、そういった必然的原因によって本種目が扱われるとなったら、1年次から多くなるはずである。ところが、結果は全地方を通じ、3年次に時間数が増えるという傾向を示している。そして、その増大は北海道地方の器械運動は除いたとしても、全ての地方で器械運動と格技の時間数が減少し、替わって、

ソフトボール、テニス、卓球、バドミントンといった種目が多く扱われることによってもたらされたものである。

本種目はその扱いが3年次に増えるということ、またそれが扱わざるを得ない必然性のことから、むしろ、生徒の興味や関心、あるいは3年次という特性を考慮して取り扱われているものであると推察できる。従って、選択種目における時間数の地方差は、生徒の興味や関心と3年次という特性に対する配慮の程度差であると考えられる。

(7) その他の種目

図表等では触れていないが、体操、ダンス、スポーツテストの取り扱われる時間数に地方差はなかった。

体操は男子で1年次およそ4~6.5%, 3年次3~5%, 女子では1年次5~10%, 3年次2.5~5.5%の範囲に

ある。

女子のダンスは 1 年次 8.5~11%, 3 年次 5.5~7% の範囲にあった。

スポーツテストについては学習指導要領に触れられていないが、全ての地方で取り扱われている。そして、男子では 1 年次、3 年次とも 5.5~8%，女子の 1 年次 8~10%，3 年次 5.5~7% の範囲にあった。

VI. 要 約

高等学校における体育の年間計画について、その実態を明らかにし、地方間の相違とそれがもたらされた要因について検討した。結果は以下のようにまとめられる。

1. 地方によって施設の整備状況が異なり、プール、体育館は北海道に低い状況を示した。特にプールの設置率の低さは、水泳の取り扱われる時間数に影響を及ぼす要因となっている。

2. 過大規模校は関東、近畿、中国の各地方に多く見られ、雨天時に支障を来たす学校も多くなっている。またこれらの地方では、標準単位数を充たしている学校が他の地方に比して少ないことから、学校規模が標準単位数の扱いに影響していると考えられる。

3. 1 単位時間 3 クラスまで授業が展開されれば、雨天時の影響を受ける割合が少ない。

4. 陸上競技を扱う時間数は学校規模に影響を受けない。

5. 体育館で学習される種目の扱われる時間数は、学校規模と体育館の広さのバランスによって変わることが考えられる。

6. 選択種目で地域の特性が見られる。また選択種目は、3 年次に時間数の増えることを示しているが、それは学校規模や施設条件によってもたらされた結果ではない。生徒の興味や関心と身体的、精神的負担の軽減に対する配慮が推察される。従って、地方差はそれらに対する配慮の差であると考えられる。

7. 地域の特性を考慮した体育の年間計画は、北海道

地方において顕著である。

8. 本研究の結果、扱われる領域及び種目の時間配分が男女、学年別にそれぞれ明らかにされ、年間計画作成にあたって参考となる資料が得られた。

注記・引用文献

- 1) 宇土正彦編著：体育科教育法入門，大修館書店，pp. 112 (1983).
- 2) 文部省：高等学校学習指導要領 pp. 1 (1978).
- 3) 文部省：高等学校学習指導要領解説，保健体育編，体育編，pp. 6 (1979).
- 4) 梅本二郎：体育科教育法，杏林書院，pp. 89-93 (1969).
- 5) 文部省：高等学校学習指導要領解説，保健体育編，pp. 208 (1972).
- 6) 文部省：高等学校学習指導要領，pp. 6 (1978).
- 7) 高等学校指導要領は第 5 節，保健体育 第 2 款，各科目で、体操、個人的スポーツ、集団的スポーツ、格技、ダンス、体育理論を体育の内容として示している。一方、同解説では、体操、個人的スポーツ、集団的スポーツ、格技、ダンスは領域、陸上競技、器械運動、バレーボール等は種目と表現されている。本研究では、同解説で用いられている表現に準じ、領域、種目という表現を用いた。
- 8) 文部省文教施設部助成課「公立学校施設の実態調査」昭和 60 年度版。
- 9) 文部省：高等学校学習指導要領 pp. 5 (1978).
- 10) 分類の意図は、3 クラスであれば運動場、体育館、武道場で各 1 クラスずつが影響を受けずに授業展開が可能であるという目安。
- 11) 大規模校とは義務教育標準法や高校標準法による標準規模以上の学校をいう。公立高等学校では 801~1100 人の学校をさす。特に 31 学級以上の学校を過大規模校といいう。
- 12) スポーツテストは学習すべき種目として学習指導要領には示されていないが、全ての地方で取り扱われているため取りあげた。
- 13) 紙面の都合で 1 次、3 年次を取りあげた。
- 14) ここでは、走、跳、投に関する学習内容のまとまりを単元としての陸上競技という意味で用いた。